漢代の永遠を象徴する図柄

林　巳奈夫

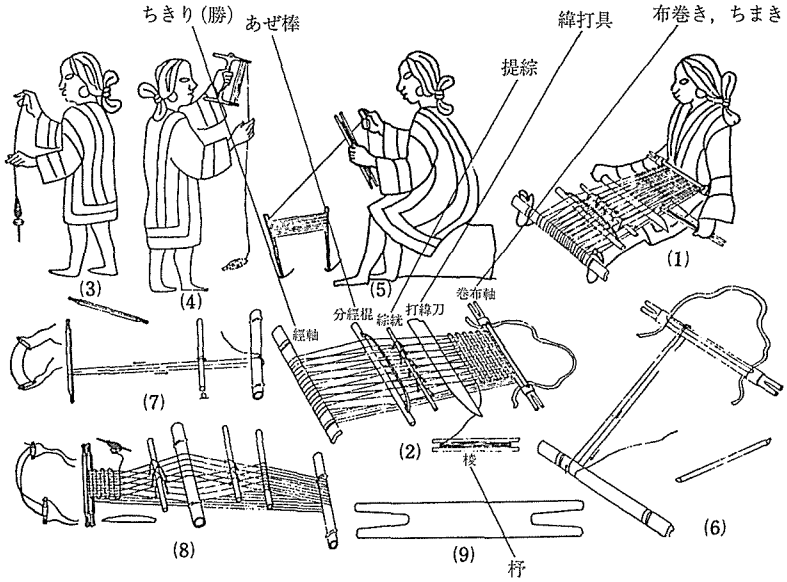
この論文の原形となるものを書いたのは十年ばかり以前のことである。その時分に八木春生氏によって『「勝」についての一考察』[1]が発表されたので私は発表をとり止めた。似たようなテーマの論文だったからである。近頃になって読み返してみて、テーマに近いところはあっても、大分方法が違うと思い、発表することにした。

一　機織りの機の滕と紝

従来の研究において、漢頃の西王母[2]に頭に着ける飾りが「勝」と、機織りの道具の部分である勝（滕）、それと戴勝という名の鳥の羽冠との関係についての解釈に混乱が見られるので整理しておこう。機織りに使う器具については、万人が理解しているとは限らないので、予め簡単に説明しておく必要があろう。

図1は雲南石寨山文化（前漢平行時代）の遺跡から発見された青銅製織器明器をもとに、現代の佤族の民具を参考にして復原したいざり機（ばた）の図[3]である。現代中国語の部品名に現代日本で用いられる用語が添えてある。原始的であるだけに却って織物を行う最小限度の器具とその機能を理解するに便宜であろう、同図(7)に示されているように、織手の手前の端の巻布軸と、向うの端の経軸の二本の棒に、平行して糸をかけ渡し、これが経、奇数番目の糸と、偶数番目の糸を分けて間に緯を通し、始めに奇数番目が上に出ていたとすると次に偶数番目の糸を上に出して間に緯を通す、ということを交互に繰り返すことによって、最も普通な平織の織物が出来てゆく。

図1、(1)、(2)で経の途中に加わっているものの内、刀形の打緯刀は経に通し、刃の所を垂直にして緯が通り易いように経の間隔をひろげ、またこれを水平にして手前にたたき、緯の間隔をつめるもの。その左にある提綜は図2のように、経を一本おきに引き



原始的機織参考図(『中国考古学会第一次年会論文集』より)(1)(2)青銅器時代いざり機復原図(3)糸を撚る(4)かせに糸を巻く(5)杼に糸を巻きとる(6)青銅器時代の整経の復原図(7)侏傴族のいざり機の整経の手順(8)侏傴族の整経の見取図(9)杼(龍川景頗族)

図1　いざり機の図

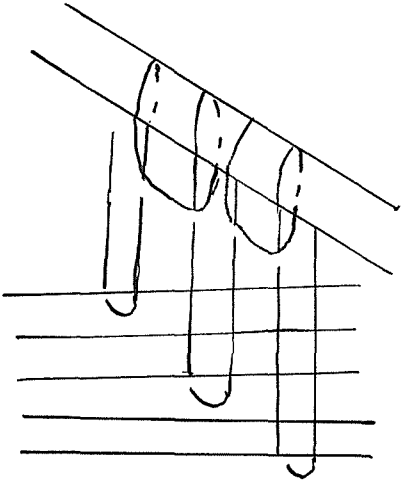


図2　経と提綜の図

上げる棒で、一本おきの経の下を廻した紐がこの棒に結合されている。その左の分経棒は経の左右の並びが乱れるのを防ぐためのもので、経が一本おきに上下を通り越している。この仕掛を使って織物を織る工程は王、朱両氏が記す通りで、思ったより手数が多く、面倒なものであるが、引用は略する。

戴勝という鳥については『方言』八に

屬鳩……自関而東謂之戴鵀、東斉海岱之間……或謂之戴勝

とあり、晋の郭璞は戴勝に注して

勝、所以纏紝

という。勝は紝を纏わせるためのものだ、と言うのであるから、勝を知るには紝の何たるかを先づ理解せねばならない。紝は『説文』に紝の別体として記されるが、紝の所には

紝、機縷也

という。機織の機の縷だ、というのである。段玉裁はこの説文の注に、縷とは麻糸を縷という。絹糸を糸というが、縷で両方を指すこともある、というようなことを言うが、これがどういうことをいっているのかと言うことには一切触れていない。それについては『説文』のすぐ次に出て来る綜を併せ考えるべきである。

『説文』に

綜、機縷也

と、紝と全く同じ解釈がつけられている。この綜の何たるかは容易に知ることができる。『綜』の条の『義証』には『六書故』

合絲為縷、機所用提經也

や『一切經音義』巻二

綜謂機縷持糸交者、屈繩制經、令得開合也等

とあるのを引いて解説する通り、今日の絲綜である（今日は絲ではなく針金を使う）。丈夫な絲を一本置き、經絲の下から巻し、上に引き上げて梭の通る開口を作る仕掛である（図2）。

『説文』に紝も綜も同様に「機縷也」というから、両者が同じ部品の異なった名称と解すれば、始めに引いた『方言』郭璞の注に「紝を纏する所以だという勝とは、図1の提綜の結ばれた横棒ということになる。

しかし、『説文』で紝と綜は同じ説解がついてはいるが、これは説明を簡略化したために同じ言い廻しになっただけで、両者は別のものでなければならない。二つの語が同じものである場合、『説文』では「紝は綜なり」「綜は紝なり」といった型式になるのが普通だからである。また阜陽双古堆出土の前二世紀前半の『倉頡篇』残簡に

機杼滕榎、紝綜蓊纑④

とあり、機織り関係の語彙を列記した中に紝と綜とは並んで記され、両者が別のものであることは確かである。

さらに先に記したように綜の結ばれた棒（図1での提綜の棒）を滕とすると具合の悪いのは次の王逸の機賦（『類聚』六五）である。そこには黄帝が布帛の製作を始め、匠人をして著名な山から材木を採って機を作らせたことを述べる中に、

勝復廻転

とある。

図4　ヤツガシラ

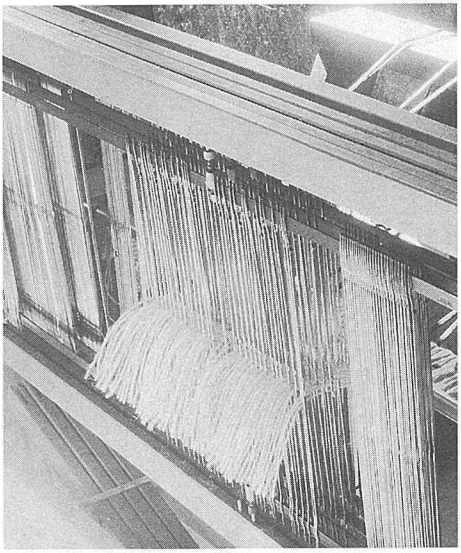


図3　織り終って紅の手前で經を切った所

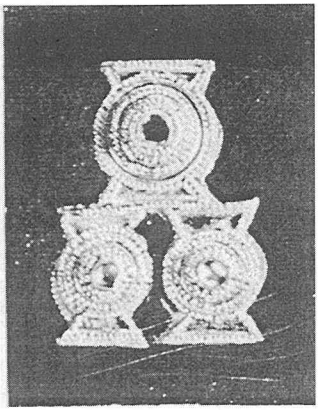


図6　金・玉勝形飾　邛江甘泉
金飾　漢

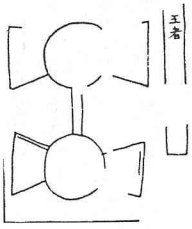


図7　金・玉勝　祥瑞
図　画像石　漢

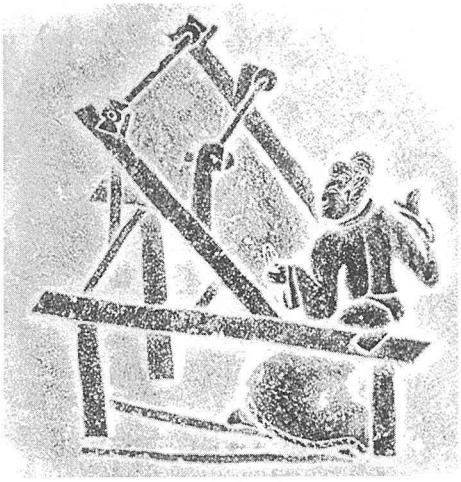


図5　漢時代の機　画像石、成都

『説文』榎について『舒藝室随筆』（『詁林』五、二五二五～二五二六頁）に復は榎で、勝も榎も夫々經と、出来た織物を巻きとるものだから廻転と言ったのだ、としている。そうとしか取りえまい。そうするとさきの図1、2の「提綜」は廻転するものではないから、滕と呼ばれた可能性は排除される。滕と榎とは、機では対になった、經を巻いておくものと、織れた織物を巻きとっておくもの、と取るのが自然である。

然らば、經を巻とって置く部分を滕とした場合、さきに引いた『方言』郭璞注に言われるように、これにはまつわらせておく糸は附属していたであろうか。あったと考える。これは国立民族学博物館の吉本忍教授の考えであるが、織物が終った時、經糸の巻いてあった滕と、經糸の下をくぐらせてあった紆は残っている。紆は引上げるべき經糸の一本おきの下をくぐらせてある。布一枚を織る毎に一々紆を經糸の下にくぐらせるのも面倒だから、織り終ったら經糸は当然紆の手前で切り、次の織物を織る時、經糸は切り残りにつないだらよい。

滕には紆の引掛った經糸の残りが附いていることになる。図3はその写真である。綜絖が針金製であるから、少し勝手が違うが。戴勝、戴紆という鳥の名は、この經糸の残りの引掛った勝や、經糸の残りに引掛った紆を頭に載せているような様子だ、という名称である。

この鳥（*upupa epos*）は和名ヤツガシラと言い日本には旅鳥として渡来するが多くはないという。ハトより少し小さい鳥だが（図4）私は実物を見たことがない。この鳥の習性を記すと次のごとくである。[5]

通常一羽で開けた畑や郊外の原の木の上に見かける。食物は地面であさる。邪魔が入ると近くの木や岩の上に飛んでゆき、或いはかなり距離を飛び地上におりる。頭上の冠羽はいつもは伏せられているが、興奮するとそれを聳え立たせて開き、鮮麗である。鳴き声はポ、ポ、ポというごとくで、一度に三声鳴く。普通人はこの鳴き声でこの鳥を名づける。よく一度に数回鳴き、高い音から低い音に変り、鳴き方は非常に早い。鳴く時に羽冠は立ち、次第に伏せる。一度鳴く毎にこれをくり返す。羽冠をそば立てるのと共に、喉は頸の伸長に従って前方にふくらみ、頭も下から急に持ち上げられ、うなづいているが如くで、大変おもしろ味がある。

ということである。

鳥のヤツガシラが滕、紆と似ているのは形だけである。葉玉森[6]は『殷虚書契前編集釈』（一、五）に林義光を引き、甲骨文の壬（I）は滕の古文で、經を持するものでその象形である。滕（蒸

韻）と壬（侵韻）は双声で旁轉である（子音は同じ、韻は通じないが、通ずる可能性はある）。故に『礼記』の戴勝は『尓雅』で戴鵀に作る、と言うのを引き、その説に賛している。元同僚の浅原達郎氏にきいたところ、壬と勝の韻の通じた可能な証拠として、氏によれば朕と勝、滕の諧声関係が挙げられる由。

侵部　　蒸部
舌音　朕　滕
歯音　壬　勝

ということが考えられる、という。

次は漢時代に流行した神様、西王母が頭に飾る、棒の両端に飾りをつけた所謂勝、この形が漢時代の機織機の画像で經軸に飾られているので（図5）話は複雑になる。

さきの図1のような原始的な機では長さ数十センチの布しか織れないが、經をもつと長くして經を經軸に巻きとっておき、綜統の上げ下げもペダルで操作するよう発達した機が漢時代の画像に見られることは、よく知られる通りである。図5は画像石に類例の多い型式である。図5で注意されるのは、經軸の両端に、西王母の頭に見るような、篆文「五」の字の真ん中に円をつけたような図像のあることである。この形について『山海經』に西王母が玉勝を戴くという所伝がある。

『山海經』北山經に

西王母、其状如人、豹尾虎歯而善嘯、蓬髪戴勝

と、すなわち、西王母は、その状は人の如くで虎歯ありて善く嘯く、蓬髪にして勝を戴く、とあり、郭璞は注に

勝、玉勝

と、即ち、勝は玉勝だ、という。郭璞のいう玉勝については後漢時代の祥瑞図が想起される。山東省嘉祥県のよく知られる武氏の墓祠堂の天井に彫られたものである。第二石第二段、左端に、画像石で西王母が頭に着けているような、真中に車軸のような棒の入ったもの一対が画かれ（図7、図8両側は上下に重なった勝形）、文字は、

……王者……

としか残らない。容庚は⑦

山左金石志疑上闕而字為玉勝、然符瑞志瑞応図記皆有金勝而無玉勝、其説不足拠

という。この形は祥瑞で八木氏が沢山拾っているように⑧、後漢時代の金石に多く残っているが、当時何と呼ばれたものか明かでない。唐時代の鏡文に祥瑞として画かれ⑨、この武氏祠で円の外側に附く四つの突起が八つになっているが、同系のものたることは疑いなく、傍に「金勝」とある。この武氏祠の図も、容庚の考えた

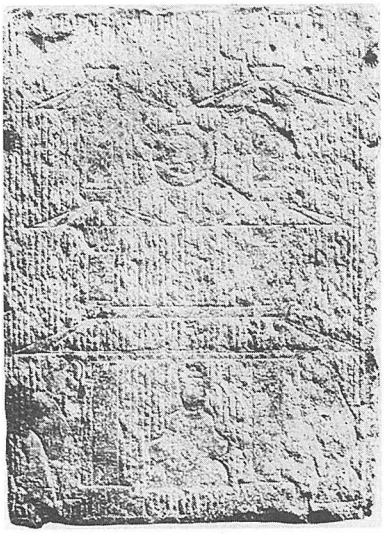


図９　闕と璧　画像石　漢　嘉祥県附近
（上下14.5㎝）

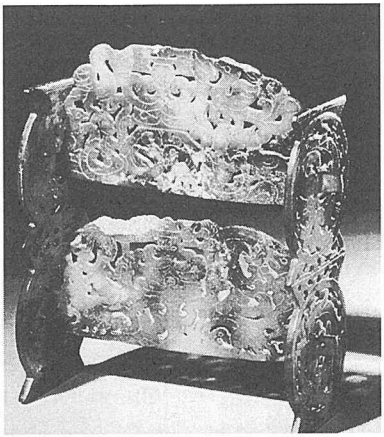


図８　玉屏　定県43号墓　漢

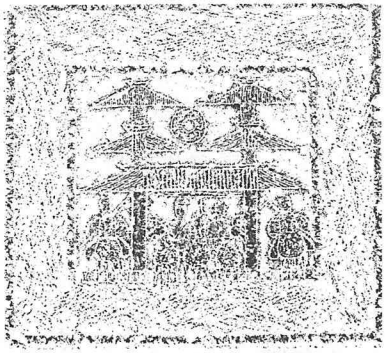


図10　闕と璧　画像石　漢　滕県馬王村

ように「金勝」であった可能性が考えられよう。この形の頭飾に名がないと面倒だから、仮に金・玉勝形と呼ぼう。

二　西王母の金・玉勝形の起源

この形はどこから生れたか。西王母の金・玉勝形の頭飾の古い形は方格規短四神鏡にあり、岡村氏が拾い出している。その西王母は正座する者の他、横坐りの者がいるが、頭に着けているのは水平の棒の両端に短い棒の加わったものである。經を巻いたものである勝が、無制動のまま幾らでも廻転して糸がほどけてゆくのを防ぐためであれば、両端に短い棒を加えたこの形で済むはずで

図11　閼と「天門」　金具　巫山県干滸子　漢

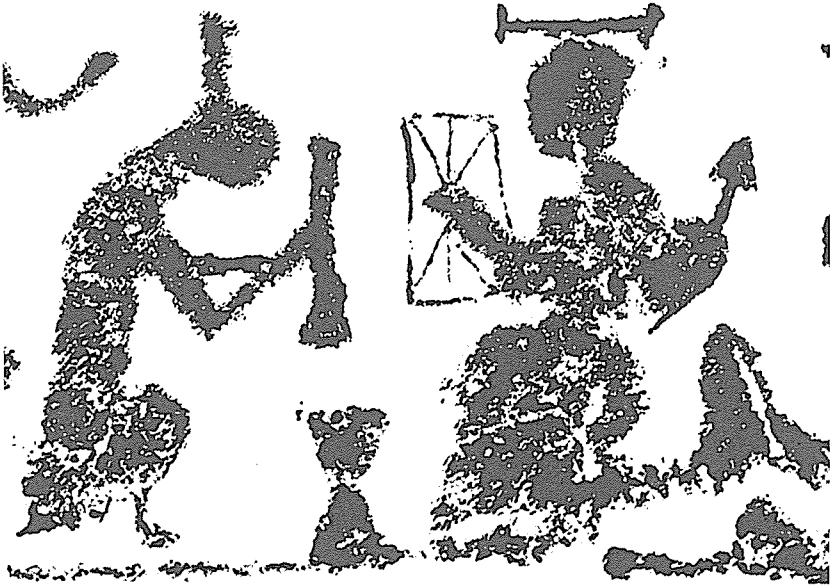
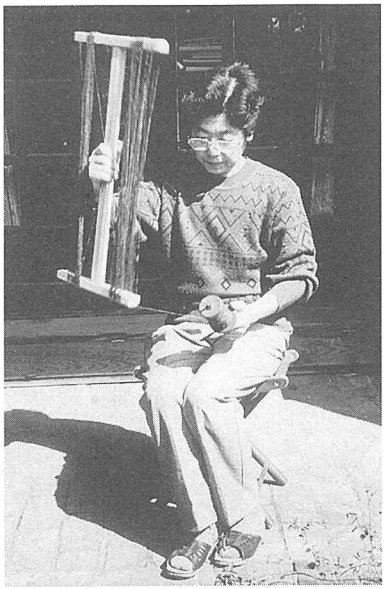


図12　枠を操る西王母　画像磚　南陽



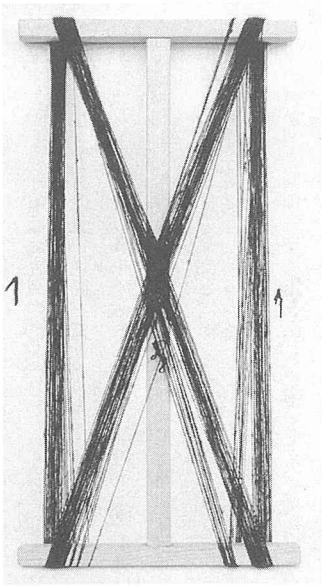


図13　枠とりと枠

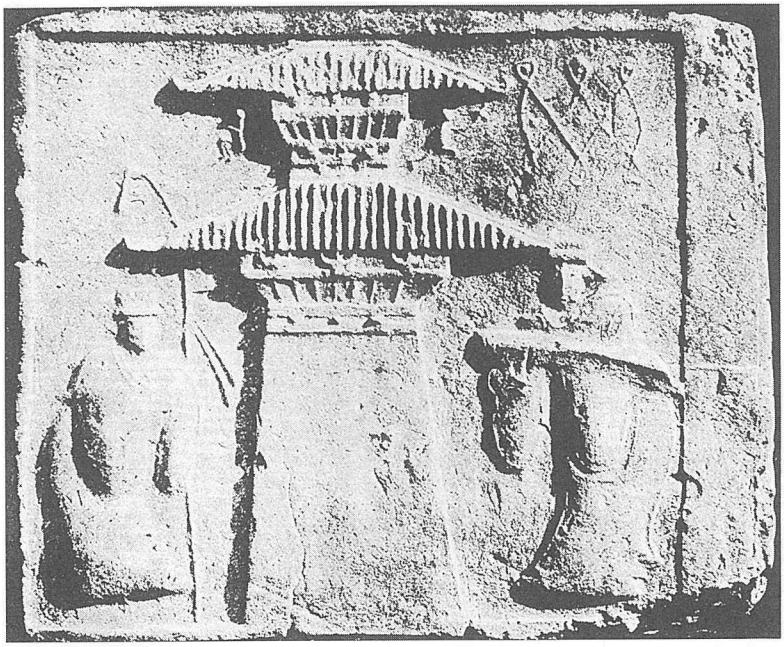


図14　閼と盤長

ある。図5のように、両端をわざわざ金・玉勝形に作ったのは、その形が象徴的な意味を担っていたからだ、と解する他ないだろう。

それではこの金・玉勝形はどういう意味を担っていたか。この形は⊠と円とから成る。×字形について先史時代の紋様について論じた者がいるが[10]、漢人の観念は『説文』「五」字についてよく窺うことができる。そこに

五、五行也、从二、会易在天地間交午也、×、古文五如此。

という。段注に二は天地を象る、と。会と易、が天地の間で交わり午するのだ。×、古文で五をこのように書く、とある。五は五行だ、というが、以下の陰陽云云とどう関係するか、各注釈者は触れる者がない。そこでこれはとり除けて考えを進めよう。「交わり午する」という午は『説文』に

午、牾也、五月陰気午逆陽、冒地而出也、此与矢同意

と、すなわち午とは牾の意味である。五月に陰の気は陽と違い、あい反し、地を突き貫いて出てくる、これは矢と同じ意味である（午の篆文の上端が矢の篆文と同形であることを言う）という。『説文』には　は逆の意で「迎える」という意味だとされる。五月に陰の気が地を突き破って頭を出し、陽を逆え、逆転する、というのである。『釈名』釈天にも、

午、許也、陰気従下上、与陽許逆也

と、即ち午とは件（逆える）の意である。陰の気がやがてこれと交替すべく、それを迎え、逆転するという考え方である。漢時代の観念で「五字形」ないし×形によって陰陽交互の盛衰、交錯、上位の交替、強弱の逆転――それには永遠につづく寒暑の同じサイクルのくり返しということも含まれる――が象徴されていたことが知られる。

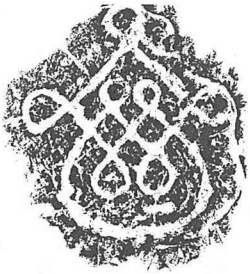
この×字形は真中に「元気」を表わす璧を配することにより、それが陰陽の気の交錯、転換の象徴であることを一層判明に示すことができたと考えられる。

×型に璧を加えた形は西王母の勝に限らず、図6～8などいろいろな形で繰返し使われる図柄であった[11]。特に取り上げるに価いするのは次のごときものである。図10のごとく、閼の間に縄を十字にかけ、それに璧をつけた画像である。このような縄で大きな璧を空中にぶら下げられるわけはない。この画像にも×と璧という象徴的な意味があったのである。最近四川省で発見されたもので、巫山県干溝子崖墓の出土で（図11）、後漢晩期のものとされる。八木氏もとり上げているので簡略に記せば、金銅製の金具で経一尺ばかり、木棺に打ちつけられたらしい。中央に閼が彫られ、閼の間に屋根が渡され「天門」と書かれる。画像石の閼の向うが

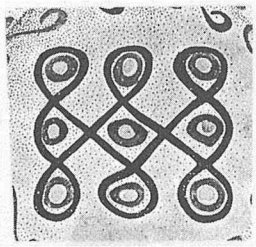
天国であったことが知られる点貴重である。閼の間に神様が坐るのも妙だから、向うの天国に居るに違いない。璧という玉器が強度の陽の気（その精は日）と、強度の陰の気（その精は月）の分化する以前の状態「元気」を象徴するものであることは筆者の以前に証したところである。[14] 万物の生産、生育の源泉となる陰と陽のエネルギーの未分裂の状態のエッセンスといったものである。閼の間に座った神が天上にあって再生、不死の神的能力を持ったものであることを象徴的に示した、というように解することが出来よう。

次に枠（かせ）の図。図12は南陽の画像塼の一部である。頭に勝を載せた女が山の麓に座り、枠を操っている。枠は図13に見るように、上下六〇センチばかりのエ字形の道具。写真に見るように紡いだ糸をこれに巻きとる。一定の長さが巻けたらこれから外し、絆（長く巻いた糸の束）にする。織物にする糸はこうしてから染めたり、糊をつけたりする。この枠は筆者のこしらえた物、操っているのは女房。銅釈のこの明白な枠の図を、日本の考古学者の中に魚捕りの道具などとする者のあるのは解せない。[15]

西王母と七夕の織女の起原的な深い係わりについては小南一郎氏の著書『西王母と七夕伝説』に周匝に論ぜられているのでそれに譲るとして、西王母が機織りに関係のある仕事にたずさわるにしても、なぜ枠とりをするのかについて筆者は次のように考える。枠に巻かれる糸は、先に記した×字形を画く、正確には篆文「五」字形を画く。図13左図で言えば、これを90回転したのが篆文「五」字形であるが。枠の上下の横棒の間を下から斜め上へ、また下へ、反対の端の下から斜め上へ、天地の間を「交互」する、という運動である。前に記した図形は静的であり、線を目で追うことによって初めてその交錯し、交替し、陰陽が入れ替り、再びもとの所に廻帰する、という内容が理解されるのであるが、ここでは糸が同じ図形を画きながら限りなく循環を積み重ねてゆく。「五」字形の象徴がこれほど直截的な表現されるものは他にない——という「五」字形の象徴は、この女であれば誰しもが従事した、まさにこの「かせとり」の作業についての思索から生れた、というべきであろう。この頭の要らない単純な往復、午逆、回転の「五」字形の運動を手でくり返しながら、暇な頭は愛する人を想い、相似た肉体の運動を連想して、これに陰陽といった発想も結びつけて中国太古以来の物質的繁栄を願ったであろう、中国人はこの運動から不死、永遠というものを思索した、とは想像に難くない。図12の紀元前一世紀末頃の遺物に見られる西王母は、金・玉勝を頭に戴く前に、手でその図形をえがく作業を行っていたのである。

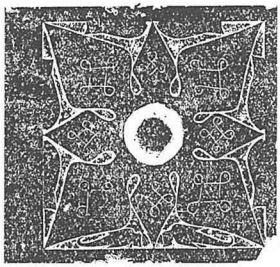


(7)

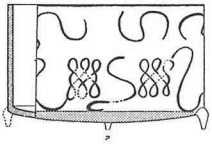


(4)

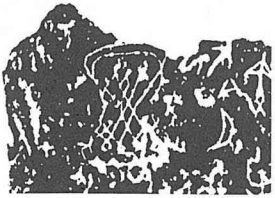
(1)



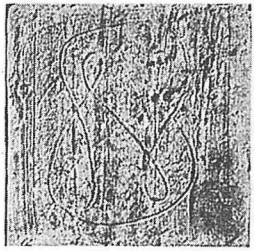
(8)



(5)

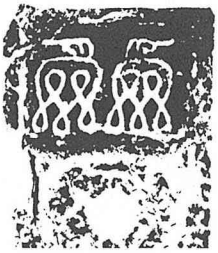


(2)



(9)

(6)



(3)

図15　盤長若干例

枠に巻いた糸は曲り角が角張り、篆文「五」字形をなすが、それに巻きつけてゆく運動は「8」字形ということが出来る。「8」字形のくり返しを横にぱらっと開いて形成した様々な図案がある。図14は四川省成都発見の画像塼で、後二世紀頃のものである。闕の一方の柱と思われるものが立ち、左に棨戟を持った門衛、右に送迎の役人といった盾を持った人物が立つ。後者の上方には「8」字形の中間を引伸し、その直線部分を交叉させる形で横に連ねた、一筆がきの図柄がある。当時の名称はわからないが、近世の吉祥図案に盤長形というのがある。形が似ているのでそう呼ぶことにする。

この図柄が闕の上層の脇の空中に画かれているのは、図9の璧や図10の×字形の帯に貫かれた璧を思い起させる。そして璧の場合と同様、これが闕につながれた装飾といったものではなく、象徴的な意味を荷ったものとして、そこに画きそえられたものである点は、璧の場合よりもさらに明白と言えよう。それではこれがどういう内容を持った図柄であるかについては、今のところ、直接の証拠に基づいて指し示すことはできない。しかしこれがあい迎えて交叉し、折り返してまたもとの所に廻帰する線をもって構成されている点、「五」字形と共通し、またそれが闕の脇に現れる点も同様であるところから考え、その象徴する内容も親縁なものであったことが想像される。この盤長の図柄について聞宥[17]は意味は不明だとしながら干一九四〇・下に爪に从う似た字が句兵にあり（図15(3)）四川省楽山崖墓に図15(7)のような図があることに注意している。このような一筆書きはシュメール、インダス文明にも知られるらしいがここでは深追いしない。図15に古代中国の例を若干引いておく。

以上、この盤長形はマイナーなものとしても、篆文「五」字形を骨格とする金・玉勝形の象徴を通じて、全ての漢人（特に女性）が仙界での再生などでなく、現実の子孫繁昌、五穀豊穣を願望したであろうことを論じた。

① 八木一九九二。
② 土肥一九七一による。
③ 王、朱一九八〇、三〇〇頁図による。
④ 文物局古文献研究室等一九八三
⑤ 郭一九六三、三二五頁。
⑥ 葉一九三四、一、五
⑦ 容一九三六、三六葉。
⑧ 八木一九九二、八三～一一四頁
⑨ 小南一九七九、口絵2
⑩ 王一九九四
⑪ 林一九九一、三三二～三五〇頁
⑫ 高一七八七、八木一九九二に「昇仙思想」関係としていろいろ拾われている。当時「昇仙思想」が流行していたとは筆者は思わない。

⑬ 趙他一九九〇

⑭ 注⑪に同じ。

⑮ 淮陰市博物館一九八八図二〇の中心の円の中に桙と糸巻を持つて立つ刻紋の神がいる。頭上に尖った耳があり、勝はないが、西王母の古い形であろうか。戦国時代のものである。

⑯ 寺沢一九九四、二九二～二九三頁に紹介。

⑰ 聞一九五五、第八一図解説。

図出典目録

図1 王等一九八〇、図三より。
図2 筆者図
図3 筆者写真
図4 鄭一九六三、図版一九、69
図5 Lim1987 pl. 12 (p. 97)
図6 南京博物院一九八一、図版三、3
図7 林一九八九、第五章附図、附図47
図8 盧一九九三、二五七
図9 Chavannes 1919, n°1259
図10 山東省博物館等一九八二、図三三〇
図11 趙等一九九〇、図一、二
図12 南陽文物研究所一九九〇、図版一六〇
図13 筆者撮
図14 重慶市博物館一九五七、図版三七
図15 (1)、(2)、蕉一九四八、二三〇七、二四一八 (3)、干一九四〇、下、二 (4)、中国科学院考古研究所一九五六、図版一〇三、三、(5)、干一九五六、図四 (6)、四川大学考古専業七八級実習隊等一九八五、図四、5 (7)、Rudolf1951 pl. 36 (8)済寧地区文物組等一九八二、図一三 (9)山東省文物管理委員会一九五五、図版九

引用文献目録

王魯昌一九九四「論彩陶紋〝×〟和〝＊〟的生殖崇拝内涵『中原文物』一九九四、一、三二～三七頁。

小南一郎一九九一『西王母と七夕伝承』東京

高文一九八七『四川漢代画像磚』上海

山東省文物管理委員会一九五五「禹城漢墓清理簡報」『文物参考資料』一九五五、六、七七～八八頁。

山東省博物館、山東省文物考古研究所一九八二、『山東漢画像石選集』済南

重慶市博物館飾一九五七『重慶市博物館蔵四川漢画像石選集』北京

済寧地区文物組、嘉祥県文管所一九八二「山東嘉祥宋山一九八〇年出土的漢画像石」『文物』一九八二、五、六〇～七〇頁。

四川大学考古学専業七八級実習隊、長寧県文化館一九八五「四川長寧〝七个洞東漢紀年画像崖墓」『考古与文物』一九八五、五、四三～五五頁。

趙殿増、袁曙光「天門〝考兼論「四川画像磚（石）的組合与主題」『四川文物』一九九〇、六、三～一一頁。

中国科学院考古研究所一九五六『輝県発掘報告』北京

鄭作新一九六三『中国經済動物』鳥類、北京

土肥悦子一九七一『手織の基本』、東京

蕉作賓一九四八『小屯』甲編

文物局古文献研究室、安徽省阜陽博物館、阜陽漢簡《倉頡篇》一九八三『文物』一九八三、二、二五～三四頁

寺沢薫一九九四「鷺と魚とシャーマンと――銅釈の図像考（I）――『同志社大学考古学シリーズVI、日本考古学と信仰』二八五～三一二

頁。
南陽文物研究所一九九〇『南陽漢代画像磚』北京
林巳奈夫一九八九『漢代の神神』京都
閔宥一九五五『四川漢代画像石選集』上海
八木春生一九九二「「勝」についての一考察」――「勝」と昇仙思想の関係を中心として――」『美学美術史論集』第九輯、成城大学大学院文学研究課、六九～一三四頁。
盧兆蔭一九九三『中国玉器全集』4、石家荘
容庚一九三六『漢武梁祠画像考釈』北京
葉玉森一九三四『殷墟書契前編集釈』
淮陰市博物館一九八八「淮陰高庄戦国墓」『考古学報』一九八八、二、一八九～二三二頁。

（京都大学名誉教授）